ほぼ週刊コラム　Partnership論　その１９９

**シリーズ：『米国Partnership税制勉強会』**

**第二十六回勉強会（通年内容は**[**年表rev.9**](http://llc.a.la9.jp/Papers/evolution%20history/evolution%20history%20of%20US%20partnership%20taxation%20rev9.ppt)**参照方）の準備**

**近年大いに栄えたcountries and regionsの幾つかが一気に壊滅することも考えられる**

20160805 rev.1 齋藤旬

 **先週述べたが、LLC制度研究会Web Siteを引っ越しした**。新しいURLは<http://llc.a.la9.jp>。ただ、旧URLにアクセスしても半年くらいはこの新URLにジャンプする様にしておく。こうしておくと、googleなど検索サイトに新URLが浸透すると聞いた。

　なお来年4月に私は定年を迎えるが、それを機にLLC制度研究会ブログも始めようと考えている。双方向で議論を深めたい。半年以上先の話だが、開設したらお知らせする。

**IR4（第四次産業革命）の和訳作業ファイルrev14を**[作業ファイル](http://llc.a.la9.jp/Papers/IR4/The%20Fourth%20Industrial%20Revolution%20by%20Klaus%20Schwab%20revX.docx)**に**アップしておいた。

Regions and cities as hubs of innovation 67-70

 Box D: Urban Innovations 70-71

を和訳した。

　**今週のpunch lineは67頁の：**

私（Klaus Schwab）が特に心配なのは、automation（機械が人間の労働を置き換えること）が特定のcountries and regionsに悪影響を及ぼさないかということ。即ち、急成長を遂げたmarketsや開発途上countriesなどがgoods and servicesを労働集約的（labor-intensive）に生産することによって享受した比較優位性が、今後急激に損なわれることが懸念される。こうなれば、近年大いに栄えたcountries and regionsの幾つかが一気に壊滅することも考えられる。

･･･を選んだ。

**そう、この「一気に壊滅することが懸念される」countryに日本も含まれると私は思う**。なぜなら、日本が急成長を遂げたのは、「労働集約的に享受した比較優位性」だと思うからだ。「えっ」と異論をとなえる読者もいるかもしれない。自然科学で日本はノーベル賞を幾つも取るほど優れている。自動車も家電も半導体も一時は世界シェアNo.1になった。日本が大いに栄えたのは、労働集約的比較優位性でなくその科学技術力の高さ故ではないか、と。

**確かに日本の技術力は高いと思う。しかし科学はどうだろうか**。そもそも科学「力」というのはピンと来ない。科学は、力任せというより「探究心」つまり究極を求める心のなせる技だと思う。「力」が不必要だとは言わないが、少なくとも「心」が主で「力」は従。

究極を求める心、この点で日本人は優れていると言えるだろうか。

勿論、探究心に優れた日本人はいる。科学の分野で探究心に優れた人も多い。そうした人の中から物理化学生物医学でノーベル賞を取る人も出た。

しかし全体としてはどうだろうか。特に、バブルが崩壊して以降、GDPが五百兆円周辺に留まり経済成長が止まって失われたン十年が始まってからの日本人に、「探究心」、特に天文や純粋数学でなく実世界につながりが見える科学分野で「探究心」を中心に据えて生きている人は、少ない様に思える。

それはある意味仕方が無い。なぜなら、経済成長が止まった中で、実世界につながりが見える科学分野で生計を立てている人は、早く結果を出すことを周りから求められるからだ。「探究心が大事」なんて言っていると「何を寝ぼけたことを言っている。早く結果を出せ」と言われてしまう。

現在、日本国家の借金は一千兆円を越え、毎年百数十兆円ずつ増えている。この状況では益々「早く結果を出せ」と言われる。「いや、急がば回れ。ここはじっくりと探究心を持って究極を求めた方が却って経済を立て直せるはず。」と言い出すことが益々難しくなる。

**･･･長くなった**。まとめると、バブルが崩壊して以降の日本が経済成長しなくなったのは、「労働集約的に生産することによって享受できる比較優位性」に劣るからではない。このことは確かだ。もう一つ言えるのは、『戦後の高度経済成長からバブル崩壊までの日本の経済成長を支えたのは、第一に「労働集約的比較優位性」、第二に「技術力」。科学を探究する点において優れていたからではない。』ということ。

しかもこの日本の高い「技術力」も、人間の持つcapacityとcapabilityを活用したからというよりは、abilityを上手に使ったからだ、と私は思う。つまり、work-intensiveというよりlabor-intensive（労働集約的）に日本の「技術力」は高まったのだと思う。

**即ちやはり、「一気に壊滅することが懸念される」countryに日本も含まれると私は思う。**確かに、壊滅を逃れる手段が「科学探究心」かどうかは分からない。Klaus Schwabは、今週和訳した部分では、smart citiesの重要性とdata deficitの除去[[1]](#footnote-1)とを強調し、それらを行うことで、新型協業（new models of collaboration）の効率と起業が可能となり、shared prosperityとその経済的機会を創り出すことが出来る様になる、と述べている。

しかし兎に角、壊滅を逃れる手段が「労働集約的に享受できる比較優位性」でないことは確かだ。やはり、このままでは日本は、「一気に壊滅することが懸念される」と私は思う。

今週は以上。来週も請うご期待。

1. 日本語の壁は、data deficitの除去を行うのにとって高いハードルだと思う。一説に依れば、Internetに流れる情報の60%は英語であり、日本語は僅か5%であるという。この状況でdeficit（欠損）を起こすな、という方が無理な話だと思う。 [↑](#footnote-ref-1)